

自分の不足を探して

小中大教員が教師志望生徒へ

総探9ゼミに外部講師

帯広三条高

【帯広発】帯広三条高校（合浦英則校長）は1年生総合的な探究の時間において、ゼミ形式の探究活動を推進している。10日、9つのゼミにおいて外部関係者による講話を実施。教育分野においては、市内の教育関係者が現場の様子を説明し、生徒の質問に答えた。

同校は4年度から、地域や社会の出来事を自分事として捉え、自身の考えを表現する能力の育成を目指し、ゼミ形式の探究活動を展開。観光業や産業、教育関係など、9テーマのゼミを教職員が受け持っている。

合浦校長が担当する教育分野では「地域にとつての学校の役割」をテーマに活動。例年、教員志望の生徒が多い同校において、地域における学校の存在価値を

明確化し、地域と共に子どもを育てる教員の役割を、生徒が実感できるよう授業を進めている。

この日、帯広大谷短期大学社会学部課の滝澤真毅教授、帯広第二中学校の高山亮司校長、古田貴則教諭、西小学校の土橋真理教諭が来校した。小・中学校の教職員は帯広三条高の卒業生。生徒たちは関心のある校種に沿って講話を受けた。

土橋教諭は、中学時代から教員を目指し、高校から小学校教員を志したことを振り返った「写真」。教員採用選考検査の自己推薦書から「子どもの発見や発想を大切に教育活動に取り組みたい」と当時の考えを紹介し、現在も変わらず思い続けていることを説明。教員になって4年目を迎え

「子どもの一瞬の表情や反応を見た時にやりがいを感じる」「一人ひとりの子どもの発達段階に関わっていると意識が強くなった」と伝えた。

古田教諭は、教員を目指し始めたきっかけや、帯広三条高での学生生活などを回顧。教員を志す生徒たちに「自分に足りない部分を探することが大切。できないことを自覚して、つぎの行動に移すよう心がけて」と呼びかけた。

質疑応答では、生徒が「授業におけるICT活用」について質問。古田教諭は「子どもたちの将来を見据えて活用を進めている」「ICT活用で困難を感じた場合、子どものつまずきを体感できたと捉えると発展につながる」と回答。「勉強にマイナスイメージを持つ



子どもへの対応」に関しては「教科学習によって考え方が身に付き、日常に生かすことができる」「学習過程の大切さを伝えるよう意識している」と答えた。

合浦校長は「今後、地域の高校生としてできることを考え、主体的に行動したいと思えるように授業を進めていきたい」と話している。